

馬耕に挑む若者と「居酒屋難民」対策

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など

最近では手作業での田植え、稲刈りはすっかり減ってしまった。まして牛馬に農地を耕起させる牛耕、馬耕にお目にかかることはまったくなくなってしまった。それが2017年の2月末から3月にかけてキューバに出かけた折に、タバコ畑で牛を使って耕起している現場を見て昔を思い出し、懐かしさを覚えるとともに、現場を見た翌日には馬に乗って1時間ほどタバコ、キャッサバ等が植えられた広大な農園の中を実に楽しくトレッキングしたことが、忘れられない。

先日、筆者が理事をつとめる長野県伊那市にあるNPO法人フリーキッズ・ヴィレッジの「未来を語る会」（長野県伊那市）の集まりがあったが、馬耕をやっていることを耳にしていたヨッサンこと横山晴樹さん（41）とはじめて親しくお話することができ、この機会にということで家にまで押し



馬耕を体験する子どもたち（横山晴樹氏提供）

かけてしまった。

伊那市高遠町の三義地区というまさに山間地域に家はあり、築約100年と古く、かつ45年も放置されて“壁も屋根も朽ち果てた”民家を改修したもので、奥さんの紀子さん、5歳と1歳の娘さん、お父さんの5人で住む。家族だけでなく、たくさんの仲間たちの力も加えて、外も内もすてきな家に改修し、ダイニングに設置したかまどで煮炊きを行い、薪を使っの五右衛門風呂はまわりを森に囲まれて、段々になった水田を見渡することができるなど、田舎暮らしを堪能している。

ヨッサンは茨城県古河の出身で、高校を卒業して大手食品メーカーで物流の仕事を担当したものの、4年目に突然“失踪”して北海道に飛び出したことがあり、そこで草をはむ馬の姿に癒やされたという。それから間もなくして退社し、自動車メーカーの期間工として働いて金をためては海外を旅し、足を運んだ国は37にも。そうした中で1年間すごしたニュージーランドで、移住者が自ら家も食べ物も作り、馬と暮らす生活に強く魅かれることに。日本に戻って馬に関係した仕事を積み重ね、今、ヨッサンは「うまや七福（しちふく）」を名乗って、馬耕そして馬搬（山で切り出した木を馬で運ぶこと）を中心に、山村留学の受け入れやフリーキッズの手伝い等もしながら、ニュージーランドで出会った移住者のように自給自足かつ馬とともに暮らしていく生活を実現しつつある。

そのヨッサンとその仲間たちが直面する問題の一つが「居酒屋難民」だという。ヨッサン家族が住む三義地区は高齢化が顕著な一方、若者の参入も多い。地元の人たちと一緒に行動する場面や機会も多く、またフリーキッズなどNPO等の地域活動も盛んで、若者同士が顔を合わせる機会は少なくない。ところが女性は「ママ友」ということで子どもを間にしての濃密な交流がはかられているのに対して、男性は車社会につき町の居酒屋まで出かけて飲ミネーションをはかることは難しい。そこで講じた対策が、みなが徒歩で集まれる範囲内にある呼び掛け人の家を臨時の“居酒屋”にしての一品ずつの持ち寄り。集めた会費で普段自宅ではなかなか飲めない酒を買って酌み交わす。不定期での開催ではあるものの、その効果はなかなかのようで、男にとって「居酒屋難民」対策はコミュニケーション確保のために絶対に欠かすことのできない最重要課題の一つであるようだ。